

審査委員長

赤池 学

(フロジェクトデザイナー、科学技術ジャーナリスト)

ウッドデザイン賞も3回を迎え、各部門のデザインクオリティは各段に上がったと感じている。さらなるレベルの向上を期待して今回はやや厳しめの評価を行なった。木の特性を活かした製品、家具、玩具や、木の特質や工法を適所に活かした建築、ライフスタイルを先取りした間取り提案のある木造住宅など、木材との相乗効果が高く、生活者視点を持つ作品は高く評価された。今後は、技術、研究でもウッドデザイン賞を契機にして、研究者間での情報の共有やネットワークづくりにも期待したい。

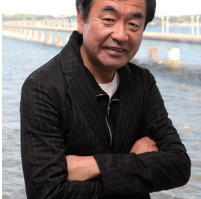


建築・空間・建材・部材分野 分野長

隈 研吾

(建築家、東京大学教授)

建築空間分野においても、単に木を使ったということではなく、生活提案や地域の特徴を活かした作品が増え、ウッドデザイン賞の趣旨が理解されてきたと嬉しく感じている。これからは人を生かすための木材利用がさらに求められる時代なので、この視点からみれば新しい建築も可能になると思う。2020年に向けて、日本の木材を使う技術も国際的な注目を集めている。先進的な取組がウッドデザイン賞へもっと応募されることを願っている。



The Courier

木製品分野 分野長

益田 文和

(プロダクトデザイナー)

ウッドデザイン賞としてあるべき作品の趣旨が固まってきた感があり、良い意味で地盤ができてきた。個々のデザインのグレードも上がり、その分、応募者のハードルも上がっている。そのなかでも、これまでの木の概念を超え新しいマテリアルをつくらうという取組がいくつも興味深かった。経済性や合理性の面から、木から別の素材に置き換わったものはたくさんあるが、それは進歩や発展でない場合が多い。これらを木を使う流れに引き戻すことで、より素晴らしい製品もたくさんあるはずである。



コミュニケーション分野 分野長

日比野 克彦

(アーティスト、東京芸術大学教授)

日常には多くの木があり、私たちは知らず知らずのうちに木を通じてコミュニケーションを伝えている。ごく当たり前にあるその世界から見れば、まだまだ応募数が少ないと思う。日常無意識に木と触れ合っている人たちに改めて木を使ってコミュニケーションしていることを意識してもらい、木の魅力を再認識してもらおうと、知りたいという行為を呼びかけることがコミュニケーション分野の役割だと思ふ。さまざまな木の魅力こそが木ならではの特長。当たり前のことを当たり前のまま、応募してほしい。

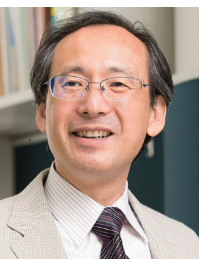


技術・研究分野 分野長

伊香賀 俊治

(慶應義塾大学大学院 教授)

調査・研究では、木の健康効果や快適性に着目した取組が増えた点がとても良かった。木をうまく使った建築物や家具などの製品は多く出てきているが、その裏付けになるエビデンスの補強が重要だ。これまでの研究者がやっていたことを踏まえ、自分たちのオリジナリティや先進性を明確にし、もっと多くの人に応募してほしい。学校、公共施設、商業施設などにどのような木の効用があるのか、それを調べさらに広げる提案が増えることを望んでいる。



建築・空間・建材・部材分野

腰原 幹雄

(東京大学 生産技術研究所 教授)

伝統工法や在来軸組工法など従来の木造工法の作品にも、デザインが重視されるようになってきた。一方で、CLTなど新たな建築材料の活用は、いまひとつこなれていない感があった。長い時間をかけて成熟した木造の歴史の中で、新しい価値観や現代生活での木の使い方をデザインを通じて変えるように考えていきたい。山には様々な木があり、その活用をもっと考え、新しい空間が生まれるに違いない。



建築・空間・建材・部材分野

鈴木 恵千代

(空間デザイナー)

今年の審査では、大きなインパクトのある作品はあまり見当たらなかった。細かい部分を読み取れば工夫があった。細かいだが、奇をてらったものより実質的なものが多かった印象。例えばCLTという新技術は、まだ日本の伝統的スタイルの中で使い切れておらず、日本独自のCLTの使い方を考える必要がある。そこにウッドデザインとしてチャレンジする価値があるし、楽しみもある。



建築・空間・建材・部材分野

手塚 由比

(建築家)

木を使って多様な空間をつくらうという動きが世の中に広まっていると実感できてよかった。駅などの公共空間で大々的に木を使っている事例などは非常に良い取組だと思ふ。これまでも木を使つてこなかった空間に木が使われることで、街も人にとって親しみやすくなっていく。一方で、木を使うことでその空間をどのように暮らしや社会に活かすのか、その答えを出しているものはまだ少ない。その良い例が増えてくることを期待する。



木製品分野

三谷 龍二

(木工デザイナー)

審査を通じて、日本には本当に多くの人が様々な木の事を考えていると思ふ。地域ならではの作品も多く、日本人は身近な素材を生活に活かしてきた歴史があった。作品を現代でも実践していると感じた。作品を作る時には、材料をどう使うかを考えるが、その先には「使う人の暮らし」が存在する。全体として、そのリアリティがまだ薄い。材料からの発想ではなく、製品の向こうにどのような暮らしがありたいのか、を突き詰めて欲しい。



コミュニケーション分野

戸村 亜紀

(クリエイティブディレクター)

デザインや言葉伝えるという部分ほどでも進化したと思う。ひとことで伝えるためにはどう表現すればよいかに注力すると良い。コミュニケーション分野は「人」の部分を見ていく分野なので、人と人を結び取組が印象に残った。受賞者同士が組み、新たなプロジェクトにつながった例も素晴らしい。人が多く関わっている作品が力強い取組になる。個人や個人は交流会などを通じて、多くの場所に足を運び、仲間を増やして欲しい。



コミュニケーション分野

山崎 亮

(コミュニケーションデザイナー)

東北芸術工科大学 教授) 東北芸術工科大学 教授) 審査を通じて、取組の複雑さが増していると感じた。デザイン的に優れているばかりでなく、人々が参加すること、その中に木の良さや使うことの大切さが広がっていくなどの副産物も生まれている。さらに、持続可能性があるか、背景にある仕組み、構造がしっかりしているか、も重視され、伝えること自体が目的となつている取組も出てきた。コミュニケーション分野はこれらの視点をターゲットで評価する段階に入ったのではないか。



木製品分野

高橋 正実

(デザイナー、コンセプター)

回を重ねるごとにウッドデザイン賞の趣旨に沿った作品が増え、この賞を皆さんと一緒により上げていくと感じられ、審査も楽しみである。多くの人々が新しい木の使い方に取組んでいるのは、ウッドデザイン賞という考え方やそのものが文化になり得る。そこに循環性や多様性、自由な創造が集積していく。応募者だけでなく、ウッドデザイン賞に共感し賛同する人がもっと増えて欲しいと思ふ。それを通じてさらなる活性化を目指したい。



木製品分野

末吉 里花

(一般社団法人エシカル協会代表理事)

審査会場では、木の持つパワーとそれを作っている方々の熱い思いに圧倒された。一見ただけでは木材を使ったとわからない製品、例えば寝具に木材チップを入れたり、木糸のドレスなどは面白い発想。木も形態を変えて私たちの生活者の手に届けて、暮らしも楽しくなり、木の可能性を広げていくことにつながる。木の良さを感ずるためには、まず製品を手にとること。これからは木を使った製品にインベションが起ることを期待したい。



コミュニケーション分野

古田 秘馬

(フロジェクトデザイナー)

今年は応募作品の取組の質が変わってきた。これまでは木や森に触れましようという一次的なものが多かったが、しっかりとした仕組みを持ち、企業自治体などのステークホルダーを巻き込んだ取組が増えた。CSV(社会貢献)からCSV(社会共創)に変わっていく流れの中で森を守りつつも、それを仕組み化して地域の事業にしていける、収益を上げ森へ再投資していく、という循環を構築しなければならぬ。こうした取組を待っている。



技術・研究分野

相茶 正彦

(木材バイオマス利用コンサルタント)

今回バイオマス利用やそのシステムなどの応募が見られ、審査対象の広がりが感じられた。従来の木造建築や製品よりも、こうした分野の新規性、提案性に注目した。今後は木そのものではなく、木が持つ構造を特化した形のもの、例えば機能性素材などの作品が出てくること、さらにこうした成分を工夫し、変化させた新材料の登場を期待したい。



技術・研究分野

恒次 祐子

(東京大学大学院 農学生命科学研究科 准教授)

今年は作品レベルが上がっており、すそ野も広がってきた。システムや仕組みづくり、川上から川下をなく取組もあり、面白く、自身の勉強にもなった。審査では科学的検証を重視している。売りとなるポイントが何かそのエビデンスも重要である。研究者もこうした賞への応募を良い機会と捉え、これまで表に出てこなかった良い試みを積極的に発掘し、研究者や事業者同士のコラボレーションができると、さらに良くなる。

